

序

奈良盆地北端に建設された平城京は、古くから盆地を南北に貫通する三本の古道のうち、盆地中央の「下ッ道」を軸としてこれを「朱雀大路」にあて、さらに縦横に大路を配して南北4.8km、東西5.9kmにおよぶ本格的都城を形成していた。

なかでも、朱雀大路は、南端に京の正門として羅城門を開き、北端の宮城正門の朱雀門と羅城門を結ぶ全長約3.8km、幅員90mの大規模なメインストリートであり、京の象徴的な役割りを荷っていた。

現在でもなお、水田畦畔等の地割に90m幅の朱雀大路痕跡を良好に残しているが、近年の都市化の進行、特に大宮通を中心にした市街地の拡大は著しく、保存対策を早急に講じる必要が生じている。

当研究所においては、平城宮南面の築地大垣を一部復原し、あわせて宮南面に沿う二条大路の修景整備を本年度に行った。朱雀門の復原についても近い将来に計画しなければならないが、このたび、奈良市によって行われた大宮通北側における朱雀大路の発掘調査は、朱雀大路復原整備計画及び、平城宮全体の保存整備とも関連するもので、ここにその調査結果を報告し、これらの整備事業の早期実現を望む次第である。

昭和 58 年 3 月 31 日

奈良国立文化財研究所長

坪 井 清 足